日本学術会議天文学研究連絡委員会特別議事録（２００１年５月１５日）

「岡山天体物理観測所の将来計画について」

日本学術会議天文学研究連絡委員会
委員長　　池内　了

第１８期日本学術会議天文学研究連絡委員会は、２月１９日および５月１５日の２度にわたって「岡山天体物理研究所の将来計画について」審議を行った。本計画の日本の天文学研究に対する重要性に鑑み、以下のような特別議事録を残すことを本委員会として決定した。

日本における観測天文学の総合的な発展のためには、大学共同機関である国立天文台における大型観測施設の建設と各大学における中小観測施設等の研究基盤の強化、という２本の柱が必要であると認識されてきた（例えば、天文学研究連絡委員会対外報告「２１世紀の天文学長期計画」１９９４年)。「すばる」望遠鏡の完成等に見るように、国立天文台の施設整備は順調に進められてきたが、大学の研究基盤の強化はこれまで遅々として進んでいないのが現状である。しかし、特色ある観測装置の開発や若手研究者の育成など、天文学研究の基礎をなす部分の一方は大学が担っており、「すばる」望遠鏡が活動を開始したこの時期に、大学の研究基盤の強化を図ることが特に重要であることを本委員会として、改めて確認した。なお、２０００年１２月に出された文部省学術審議会宇宙科学部会報告「我が国における天文学研究の推進について」においても、＜今後、それぞれの大学が特色を活かした独自の中小望遠鏡を持ち、それらによる創造的な開発研究を通じて教育と研究を推進することはますます重要である＞と述べられている。

その中で、国立天文台付属岡山天体物理観測所を京都大学へ移管し、建設後４０年を経た現有１８８センチ望遠鏡を新鋭の望遠鏡に置き換えて先端的研究を推進するとともに、他大学とも連携して運用することを通じて、国内における観測研究や装置開発の拠点とし、かつ若手研究者育成のための研究教育装置として有効利用を図る事を目指す将来計画が、京都大学理学部から提案された。この計画は国立天文台においても積極的に受け止められ、上記目的達成のための施設移管や整備について京都大学と協力して推進する意向であることが確認された。

それらの提案を受けて本委員会として議論した結果、この将来計画は、本委員会が目指す大学における天文学の研究教育基盤の強化という方向に合致しており、天文学研究の総合的な発展のため早期に実現するよう積極的に推進すべきであるとの結論を得た。

（以上）